



Title	英語の「繰り上げ」構文に対する意味的分析
Author(s)	浅井, 良策
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 71-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99383">https://hdl.handle.net/11094/99383</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 英語の「繰り上げ」構文に対する意味的分析\*

浅井 良策

### 1. はじめに

従来の生成文法の研究では(1)に見られるような文のペアは「繰り上げ」(raising)と呼ばれる統語規則によって相互に関連づけられてきた。この操作によって(1a)における動詞の補文主語heが(1b)に見られるように、主節の目的語位置に繰り上げられると分析される(cf. Postal 1974)。

- (1) a. I believe that he is honest.  
b. I believe him to be honest.

しかしながら、この統語規則は全ての事例に当てはまるわけではなく、多くの意味的制約が「繰り上げ」規則の出力形式に観察されている。

第一に、「繰り上げ」構文の補部には状態的な述語が要求される。

- (2) a. I believe that he works very hard.  
b. \*I believe him to work very hard. (Stockwell et al. 1973: 570)
- (3) a. I believe that Bill will win tomorrow.  
b. \*I believe Bill to win tomorrow. (Postal 1974: 25)

つまり、(2b) や (3b) のように、「繰り上げ」構文はその補部内の述語が出

来事を表すようなものである時、容認不可能と見なされるのである。以下ではこの制約を<状態述語要件>と呼ぶことにする。

二つ目の制約は、「繰り上げ」構文の補部節の内容が主観的な判断であると解釈されなければならないということである。Borkin (1984) は「繰り上げ」構文の補部節の命題が「事実の問題」(matters of fact) を表している時、容認性が下がることを指摘している。以下ではこの制約を<主観性要件>と呼ぶことにしよう。

(4) a. When I looked in the files, I found that she was Mexican.

b. ?When I looked in the files, I found her to be Mexican. (Borkin 1984: 56)

三つ目は「繰り上げられた」名詞句の指示性に関するものである。Davison (1984) はそのような名詞句は特定の個体として選び出せるようなものでなければならないとしている。

(5) a. We believe that any doctor knows the answer.

b. ??We believe any doctor to know the answer.

(6) a. They declared that the shaggiest dog was the winner.

b. ??They declared the shaggiest dog to be the winner. (Davison 1984: 812)

(5b) の any doctor が特定の医者を指していないことは明らかであるし、(6b) が容認されないのも、ここでの the shaggiest dog が、通常の最上級の解釈ではなく、毛深さの程度が非常に高いという条件を満たす全ての犬を指示対象とする解釈だからである。以下ではこの制約を<特定性要件>と呼ぶことにする。

さて、今見たこれらの要件は「繰り上げ」構文と非繰り上げ構文が純粹に統語的に関連しているのではなく、それぞれが独自の意味特性を持った別個の構文であることを示唆しているように思われる。そこで、本稿では両構文

の交替に関して意味的な観点から分析を試みたいと思う。より具体的には、繰り上げ構文は、非繰り上げ構文に比べて、話者の主節主語指示物に対する内的視点がより明確に反映された構文であることを主張する。しかし、この主張の詳細を述べていく前に、まず次節において、同じく「繰り上げ」構文を意味的な観点から扱った先行研究として Langacker (1991, 1995) の分析を概観しておくことにする。

## 2. Langacker (1991, 1995)

本節では Langacker (1991, 1995) の認知文法による繰り上げ構文の分析を批判的に検討し、彼の際立ちに基づく説明では繰り上げ構文の成立を十分に予測できないことを指摘する。

(7) a. I expect that Don will leave.

b. I expect Don to leave.

彼の分析に従えば、(7) における「繰り上げ」構文と非繰り上げ構文の交替は同じ基底構造からの派生によるものではなく、両構文に対する解釈 (construal) の相違が反映された結果であることになる。すなわち、(7) の各文は同様の概念内容を持ちながらも、(7b) の Don には特別な認知的際立ちが与えられていると分析されている。(7b) の Don は、(7a) の場合と同様、主節動詞 expect が表す状況に直接的な意味関係を持っていない。しかし、それが主節目的語の位置に現れるのは、expect と直接的な意味関係を持つ「Don が去る」という事柄を喚起する認知的に際立つ参照点として機能しているからである。また、意味内容が希薄ないわゆる「虚辞」の there や it あるいはイディオムの一部も「繰り上げられた」名詞句として機能するが、ここでも同様の説明がなされる。

(8) a. I expect there to be an alligator in the basement.

- b. I expect it to rain all morning.
- c. I expect tabs to be kept on several prominent activists.
- d. \*I expect {there/it/tabs}. (Langacker 1991: 459)

これらの要素自体は (8d) が容認不可能なことからも明らかなように、主節動詞 expect が表す状況に対して直接意味的に関係するものではない。しかしそれにも関わらず、これらが主節目的語として現れているのは、主節動詞 expect が直接関与する不定詞補部全体の表す事柄を喚起する参照点として機能しているためである。このように、Langacker は「繰り上げられた」名詞句を認知的に際立つものとして捉えることで、動詞の直接目的語位置に現れる名詞句に制約が課されないという「繰り上げ」構文の透過性 (transparency) を説明しようとしているのである。

しかし問題はそれほど簡単なものではなく、全ての「繰り上げ」構文の直接目的語位置が透過性を示すわけではないことに注意する必要がある。これは、すでに見た「特定性要件」に関わることである。

- (9) a. ??We believe any doctor to know the answer. (= (5b))
- b. ??They declared the shaggiest dog to be the winner. (= (6b))
- c. ??They reported the smallest vibration to be measured by the instrument.
- (Davison 1984: 812)
- (10) a. \*We believe the littlest thing to be irritating to him.
- b. ?We believe the slightest discrepancy to be irritating to him.
- c. We believe your strange behavior to be irritating to him. (Borkin 1984: 46)

彼の分析に従えば、目的語位置に「繰り上げられた」名詞句は認知的に際立っているので、(9) の各文が容認されないことや、(10a) から (10c) につれて容認性が高くなるのは、特定のな実体の方が非特定のな実体よりも認知的な際立ちが高いからであるという説明が可能なのかもしれない。しかしなが

ら、「繰り上げ」構文の成立を名詞句指示物の特定性に求めようとする、(11)の事例に見られるように、Langackerが扱っている expect が形成する「繰り上げ」構文の目的語位置に特定のな実体を指示しない名詞句が現れ得ることが説明困難になる（(11) と (12) の下線は筆者によるものである）。

- (11) a. People expect women to be highly emotional. [BNC]  
b. Like the French, they expect everyone to understand their language. [BNC]  
c. You can expect every room to have satellite TV, a mini bar, direct dial telephones... [BNC]  
d. No doubt there will be an extensive scrutiny from those who expect everything to be perfect. [BNC]

同様に、動詞 want が形成する「繰り上げ」構文にも＜特定性要件＞が課されない。

- (12) a. I want the slightest infraction to be brought to my attention. (Borkin 1984: 47)  
b. The most important factor in planning your holiday is that you want every detail to be perfect for you not a holiday perfect for someone else. [BNC]  
c. We want everyone to return home safely to their families at the end of their day's work. [BNC]

さらに、これらの動詞が形成する「繰り上げ」構文は他の「繰り上げ」構文と異なり、＜状態述語要件＞も課されない。

- (13) a. \*Yesterday, John believed Mary to leave tomorrow. (Wurmbrand 2013: 39)  
b. Yesterday, John expected Mary to leave tomorrow. (Wurmbrand 2013: 9)  
c. Yesterday, John wanted Mary to leave tomorrow. (ibid.)

従って、＜特定性要件＞と＜状態述語要件＞の有無の観点から少なくとも「繰り上げ」構文は二種類に区別されることがわかる。実際、この区別は、Postal (1974) のいう B-verbs クラスと W-verbs クラスの区別<sup>1)</sup>に対応しており、本稿で指摘された意味制約が課せられる「繰り上げ」構文は前者に属し、そのような制約が課されないタイプは後者に属している。Langacker の分析は制約が課されない W-verbs クラスに属する expect が形成する「繰り上げ」構文に基づいてなされているため、なぜ B-verbs クラスの「繰り上げ」構文に意味制約が課されるのか説明困難なのである。

### 3. 内的視点

それでは、Langacker が扱っていない B-verbs クラスの「繰り上げ」構文の成立をどのように特徴づけることができるのであろうか。すでに見たように、＜特定性要件＞、＜状態述語要件＞、＜主観性要件＞という三つの意味的要件が課されるということであったが、本節では、これらの意味要件から、「繰り上げ」構文が話者の主節主語指示物に対する内的視点が反映された構文であるということを主張する。内的視点は以下のように定義される。

- (14) 内的視点：主節主語指示物に対して情報が支配的に帰属する際に主節主語指示物に対して取られる視点

#### 3.1. 主観性要件

このような特徴づけによって、まず＜主観性要件＞の存在が説明可能となる。すでに見たように、(15b) の「繰り上げ」構文が容認されないのは、その補部の表す情報が「事実の問題」と関わるからであった。そのような情報が内的視点と相いれないことは明らかである。

- (15) a. When I looked in the files, I found that she was Mexican.

b. ?When I looked in the files, I found her to be Mexican. (Borkin 1984: 56)

- (16) a. The doctor<sub>i</sub> has told Sam that Mary<sub>j</sub> has leukemia, but Sam won't believe that she<sub>j</sub> is sick.  
b. \*The doctor<sub>i</sub> has told Sam that Mary<sub>j</sub> has leukemia, but Sam won't believe her<sub>j</sub> to be sick. (Borkin 1984: 79)

(15) の状況において「彼女がメキシコ人である」という情報は、ファイルという情報源によって客観的な事実として提示されている。従って、そのような情報を主節主語 I に対して支配的に帰属させることができないのである。また、(16) に見られる容認性の差に関しても同様の説明が可能である。すなわち、動詞 believe の主語 Sam が抱く「彼女が病気である」という情報の源が Sam 以外に存在する (The doctor) ため、(16b) の「繰り上げ」構文が容認されないのである。このことから、「繰り上げ」構文と非繰り上げ構文の交替を「繰り上げられた」名詞句に与えられた認知的際立ちに求めようとする Langacker の分析では、どのような場合に「繰り上げ」構文が成立しないのか予測することが困難であることが分かる。

今度は反対に、「繰り上げ」構文として容認されている事例について見ることにしよう。

- (17) a. Jane knows that she is intelligent.  
b. Jane knows her to be intelligent (Riddle 1975: 470)  
(18) a. ?I know Lisbon to be the capital of Portugal.  
b. I know Mary to be a Mormon. (Wierzbicka 1988: 50)  
c. I know Mary to be dishonest. (ibid.49)

Riddle (1975) によると、(17a) の非繰り上げ構文において「彼女が賢い」という命題が真であることが論理的に含意 (entail) されているが、(17b) の「繰り上げ」構文においてはそのような含意は存在しないという。このことは (18a) のように、反論の余地のない公の知識に関する情報が容認され難い一方で、



(18b,c) のように個人の私的判断が関わる情報であれば容認されることから確かめられる。同様のことは、動詞 *remember* が形成する「繰り上げ」構文においても観察され、非繰り上げ構文では「ジョンに髪の毛がない」という命題内容を否定することができないが、「繰り上げ」構文では否定することができる。

(19) a. Martha remembered that John was bald, #but he wasn't.

b. Martha remembered John to be bald, but he wasn't. (Moulton 2009: 197)

従って、(17b) の Jane と (19b) の Martha は、事実であることが保証されていない命題内容を心に抱いているということであるが、これはつまり Jane と Martha に情報が支配的に帰属していることを意味していると言える。

また、Kiparsky and Kiparsky (1970) が指摘しているように、補文において話者が真実性を前提とする命題を表す叙実述語 (factive predicate) に相当する動詞が一般に「繰り上げ」構文自体を形成しないことも注目に値する。

(20) a \*I forgot him to be bald. (Kiparsky and Kiparsky 1970: 164)

b.\*He regrets Bacon to be the real author. (ibid.: 161)

c.\*We {noticed / emphasized / regret} John to be talented. (Hegarty 1992: 31)

cf. We {believe / claim / suppose} John to be talented. (ibid.)

ここでもまた Langacker の分析では、なぜ、(19) の「繰り上げ」構文が成立しないのか予測困難である。一方で、我々の分析では、これらの文が容認されないのはある命題の真実性を前提としながら、その命題が特定の個人に支配的に帰属させることに矛盾が生じるためであるということになる。

### 3.2. 特定性要件、状態述語要件

前節において、「繰り上げ」構文の〈主観性要件〉は主節主語に対する内的

視点の反映であることを示したが、他の意味要件の存在も内的視点という特徴づけから説明できることを示していくことにする。

まず、＜特定性要件＞について見てみることにしよう。

- (21) a. ??We believe any doctor to know the answer. (= (5b))  
 b. ??They declared the shaggiest dog to be the winner. (= (6b))  
 c. ??They reported the smallest vibration to be measured by the instrument. (= (9c))  
 (22) (= (10)) a. \*We believe the littlest thing to be irritating to him.  
 b. ?We believe the slightest discrepancy to be irritating to him.  
 c. We believe your strange behavior to be irritating to him.

「繰り上げ」構文に非特定のな実体を指示する名詞句が現れ難いということであったが、これも、非特定のな実体が主節主語指示物に対して内的視点を取ることを妨げていることによると言える。すなわち、ある情報について判断する際、それが不特定な実体についてのものであるならば、その情報はその判断主体に支配的に帰属させるのは困難なのである。

同様に、Gee (1975) は (23a) が「he believes that there are spys.」という意味でしか解釈できない一方で、(23b) では、「John believes of someone in particular that he is a spy.」という意味解釈がなされるとしている。

- (23) a. John believes someone is a spy.  
 b. John believes someone to be a spy. (Gee 1975: 304)

Gee の直観が正しいとすると、(23b) の解釈では、主語 John が彼の信念世界においてスパイが誰であるか特定していることになる。しかし someone という名詞句の性質上、話者はスパイが誰であるかを特定できないので、スパイのアイデンティティに関する情報が主語 John に支配的に帰属させられていると言えよう。(22c) の容認性に加えて、この事例からも繰り上げ構文に課せ

られる<特定性要件>と主節主語に対する内的視点との相関性が確認できる。

また、「繰り上げ」構文において<特定性要件>が存在することは、数量的なデータからも裏付けられる。Noël (2003) のBNCコーパス調査 (claim, judge, prove, show, think, believeを対象) によると、「繰り上げられた」目的語位置に現れる名詞句の91パーセント (410 事例中375例) が談話上すでに述べられた指示物を表しているということであった。談話上すでに述べられた指示物は特定性を帯びているので、「繰り上げ」構文の「繰り上げられた」名詞句を認知的に際立つものとして捉える Langackerの分析とも一見、整合しているように思える。しかしながら、同調査において、非繰り上げ構文の補文主語位置に現れる名詞句についても、談話上すでに述べられた指示物を表す場合が65パーセント (513事例中334例) という高い割合を示していることから、両構文の相違を「繰り上げられた」名詞句の認知的際立ちのみに求めることは十分な特徴づけとは言えないのである。「繰り上げ」構文において、談話上すでに述べられた指示物を表す傾向が強く見られるのは、ある情報の主題となる名詞句の指示的特定性が主節主語の表す主体にその情報を支配的に帰属させるために必要とされているからであろう。

次に、もう一つの意味要件である<状態述語要件>について考えてみよう。

- (24) a. Leo believed Julia to be smart. (Wurmbrand 2013: 4)  
 b.\*Leo believed Julia to sing in the shower yesterday. (Wurmbrand 2013: 40)  
 c. Leo believed Julia to be singing in the shower yesterday. (ibid.)

これまで多くの学者が指摘しているように、「繰り上げ」構文の不定詞補部には状態述語が要求されている (Bolinger 1974, Borkin 1984, Mair 1990, etc.)。従って、(24b) のように、singのような出来事を表す述語が現れた場合、「繰り上げ」構文は容認不可能と判断され、(24c) のように、進行相などの文法的手段によって「状態述語化」されなければならないのである。また、<状態述語要件>は数量的なデータからも裏付けられる。実際、Noël (2001) は

25個の「繰り上げ」動詞<sup>2</sup>を対象としてBNCコーパス調査を行い、それらの動詞の不定詞補部に生起する述語の中で、状態を表すと見なされるbeとhave（所有と完了相）が全体の93.67パーセントを占めることを報告している。

そして、この〈状態述語要件〉も「繰り上げ」構文の主節主語に対する内的視点という観点から分析可能である。

(25) a. Thelma believed Hans to love Lin.

b. ??Thelma believed Hans to kiss Lin. (Katz 2003: 209)

(26) a. Hans loves Lin.

b. ??Hans kisses Lin. (ibid.)

Katz (2003) は、(25) における容認性の対立を (26) の容認性の対立と平行的なものとして捉えている。(26) に見られる対立は、英語の現在時制が状態述語と整合する一方で、出来事を表す述語とは一般に整合しないことによるものである。Katzはこれと同じ原理を (25) の「繰り上げ」構文間に見られる対立に適用している。すなわち、ThelmaがHansに対して何らかの判断を下したのは発話時から見て過去の時点におけるものであるが、その判断の内容自体はThelmaが判断を下した時点から見て「現在時」(つまり同時) に成立していなければならないのである。判断を下す時点は瞬間的なものなので、その時点に同時に成立し得るのは「Linにキスをする」という出来事ではなく、時間幅を持った「Linを愛している」という状態なのである。

このように「繰り上げ」構文を、主節主語を軸とする一種の現在時制構文として見なすKatzの分析は主節主語への情報の支配的帰属性を問題とする我々の分析とも整合するものである。主節主語が判断を下す時点で、同時に成立し得えない出来事は主節主語へ支配的に帰属させることは不可能であるし、また (27) が容認されないのも主節主語が判断を下す時点より未来の出来事がその不確定性から主節主語へ支配的に帰属させられるような情報ではないためである。

- (27) a.\*Yesterday, John believed Mary to leave tomorrow. (= (13a))  
 b.\*I believe Bill to win tomorrow. (= (3b))

以上のことから、「繰り上げ」構文の＜状態述語要件＞は主節主語への情報の支配的帰属を保証するために存在すると言えるだろう。Katzの分析においても同様の説明が可能であるかもしれないが、我々が提示している主節主語に対する内的視点という概念は、これまで見てきたように、＜状態述語要件＞だけでなく＜主観性要件＞と＜特定性要件＞をも捉えることができるという点でより包括的なものである。

#### 4. まとめ

最後に、ここまでの議論の要点を整理し、本稿を締めくくりにしたい。本稿では、「繰り上げ」構文と非繰り上げ構文が形式的な操作で関連づけられるのではなく、「繰り上げ」構文が成立する背後には、意味的な要因、すなわち、主節主語に対する内的視点という話者の解釈が存在していることを示してきた。Langacker (1991, 1995) も「繰り上げ」構文の成立に意味的要因の存在を認め、主節動詞の直接目的語位置に「繰り上げられた」名詞句が後に続く不定詞補部で表された内容を喚起する参照点として認知的際立ちが与えられていると分析している。しかし、Langackerの分析では、(28) と (29) に示されるように、多くの「繰り上げ」構文に＜状態述語要件＞や＜特定性要件＞といった意味制約が課せられるという事実を扱うことができない。

- (28) a. I believe that Bill will win tomorrow. (= (3a))  
 b.\*I believe Bill to win tomorrow. (= (3b))  
 (29) a.??We believe any doctor to know the answer. (= (5b))  
 b.??They declared the shaggiest dog to be the winner. (= (6b))  
 c.??They reported the smallest vibration to be measured by the instrument.  
 (= (9c))

というのも、Langackerが分析対象として扱ったexpectが形成する「繰り上げ」構文にはこれらの意味制約が存在しないからである。

(30) a. I expect that Bill will win tomorrow.

b. I expect Bill to win tomorrow. (Postal 1974:25)

(31) a. Like the French, they expect everyone to understand their language. (= (11 b))

b. You can expect every room to have satellite TV, a mini bar, direct dial telephones... (= (11 c))

Langackerは「繰り上げ」構文に対して、主節主語と「繰り上げられた」名詞句との間に直接的なインタラクションが存在しないために、あらゆる名詞句が主節目的語位置に現れるという一般的特性を指摘している。しかし、この一般化では、それがexpectの形成する「繰り上げ」構文<sup>3</sup>についての観察に基づいてなされたものであるため、直接的なインタラクションが存在しないにも関わらず、「繰り上げられた」名詞句の非特定性ゆえに(29)が容認されないことが説明不可能である。同様に、なぜ(28b)が容認されないのかも説明されない。本稿ではこれらの事例を説明するために、繰り上げ構文の成立に関して主節主語に対する内的視点という概念が必要であることを示したのであった。

## 注

\* 本稿は、大阪外国語大学大学院 博士後期課程 言語社会研究科言語社会専攻を受験するために提出された筆者の修士論文の一部を加筆・修正したものである。他大学から博士後期課程に入学した者であるにも関わらず、指導学生として温かく迎えて下さり、また今日に至るまで長年の間、様々な面において筆者の大学院生生活を支えて下さった杉本孝司先生にこの場をお借りして感謝の意を示したいと思います。

1. B-verbsはbelieveに代表されるような思考を表す動詞が多く、W-verbsはwant, expect, prefer, like, hateなど願望や好悪を表す動詞が多い。W-verbsの「繰り上げ」構文がB-verbsのそれと異なる点としては、不定詞補部が未来の出来事を表す傾向にある、対

応する that-clause の非繰り上げ構文を持たないことが多い、受動化できないことが多いということなどが指摘されている。また、先行研究においても通常、B-verbs の「繰り上げ」構文が分析対象として扱われている。

2. 調査対象の25個の動詞は以下に示す通りである。

say, repute, rumour, understand, take, presume, suppose, know, deem, assume, find, believe, show, prove, imagine, consider, feel, declare, think, judge, hold, reckon, estimate, report, allege  
尚、say, repute, rumor は「繰り上げ」構文の事例が存在しないため(但し、受け身では存在)、実質的には、それ以外の22個の動詞に対する調査となっている。

3. 動詞 expect が形成する「繰り上げ」構文は以下の事例に見られるように主節主語と「繰り上げられた」名詞句との間に直接的なインタラクションが認められるような事例が存在する。

I expect you to be done by noon,

(i) ...so get on with it!

(ii) ...?if you don't mind. (Givón 2001: 51)

この点からも、expect は典型的な「繰り上げ」動詞とは言えないと思われる。そのような動詞が形成する「繰り上げ」構文を代表的事例と扱い一般化を図ることはやはり問題があるだろう。

## 参考文献

- Bolinger, Dwight L. (1974) "Concept and Percept : Two Infinitive Constructions and their Vicissitudes," *World Papers in Phonetics : Festschrift for Dr. Onishi's Kiju*, 65-91, The Phonetic Society of Japan, Tokyo.
- Borkin, Ann (1984) *Problems in Form and Function*, Ablex, Norwood, New Jersey.
- Davison, Alice (1984) "Syntactic Markedness and the Definition of Sentence Topic," *Language* 60, 797-846.
- Gee, James P. (1975) *Perception, Intentionality, and Naked Infinitives : A study in Linguistics and Philosophy*, Ph.D. dissertation, University of Stanford.
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: An Introduction*, Vol. II, John Benjamins, Amsterdam.
- Hegarty, Michael (1992) *Adjunct Extraction and Chain Configuration*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Katz, Graham (2001) "(A)temporal Complements," *Audiatur Vox Sapientiae : A Festschrift for Arnim von Stechow*, ed. by Caroline Féry and Wolfgang Sternefeld, 240-258, Akademie-Verlag, Berlin.
- Katz, Graham (2003) "On the Stativity of the English Perfect," *Perfect Explorations*, ed. by

- Artemis Alexiadou, Monika Rathert, and Arnim von Stechow, 205-234, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) "Fact," *Progress in Linguistics*, ed. by Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph, 143-73, Mouton, The Hague.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II: *Descriptive Applications*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1995) "Raising and Transparency," *Language* 71, 1 -62.
- Mair, Christian (1990) *Infinitival Complement Clauses in English: A Study of Syntax in Discourse*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Moulton, Keir (2009) *Natural Selection and the Syntax of Clausal Complementation*, Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Noël, Dirk (2001) "The Passive Matrices of English Infinitival Complement Clauses: Evidentials on the Road to Auxiliarihood?," *Studies in Language* 25, 255-296.
- Noël, Dirk (2003) "Is There Semantics in All Syntax? The Case of Accusative and Infinitive Constructions vs. *That*-Clauses," *Determinants of Grammatical Variation in English*, ed. by Günter Rohdenburg and Britta Modorf, 347-377, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Postal, Paul M. (1974) *On Raising: One Rule of Grammar and Its Theoretical Implications*, MIT press, Cambridge, MA.
- Riddle, Elizabeth (1975) "Some Pragmatic Conditions on Complementizer Choice," *CLS* 11, 467-474.
- Stockwell, Robert P., Schachter, Paul. and Partee, Barbara H. (1973) *The Major Syntactic Structures of English*, Holt, Rinehart, and Winston, New York.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.
- Wurmbrand, Susanne (2013) "Tense and Aspect in English Infinitives," ms.  
<<http://wurmbrand.uconn.edu/Papers/Infinitives.pdf>>